JAふらの青年部（役員）意見交換会実施報告

令和５年１１月３０日に開催したJAふらの青年部役員７名と市農林課で、第４次富良野市農業及び農村基本計画（案）について意見交換を行いましたので報告いたします。

１．　多様な人材の確保・育成

【ヘルパーについて】

・馬鈴薯収穫は人手が必要で過去にヘルパーをつかっていたが家族４人でできればその方が楽。家族経営でできる範囲の方法を考える。経費を抑える。
・ママ友が固定化しており、同じ人を雇用しているため人手不足を感じていない。ハウス掛けはアグリプランから来てもらっている。ほぼ一年は問題ない。次年度は一人退職するためこれからどうなるか不安。
・昔から家族（３人～４人）で営農、現状は維持できている。今後は規模拡大の可能性もあるが、現状は大丈夫。
・農協のヘルパーをつかっている。必要な時と不要な時で融通がきくのは良い。３か月のみなど、通年雇用よりヘルパーは助かっている。教えるのも大変なので簡潔な作業をしてもらっている。
・ヘルパーは毎度教える必要や毎度同じの場合もある。経験者ばかりではないため、計画通りにはいかないこともある。１年限りの場合もありまとまった人材とはならない、定着が微妙なところが不便。
・人件費が問題、ヘルパーも上がっている、未経験者に払うことをためらうのでは、教え方にも差がある。補助があれば良い。
・畑作だと春・秋のみ。ヘルパーとの期間と異なるため集めにくい。
・子育て中のママにはそれにあわせた雇用をしている。基本、土日休み、急な休みも対応。
・他の地域で、アプリを導入していると聞いたことがある。そういったものはあるか。
　→タイミーなど狙い撃ちができるかも。
・短期間バイトは責任感が薄くなる。バイトテロが不安、であればヘルパーの方が責任感がある。農協のバックアップ、保険など必要。
・ヘルパーを要望しても足りないときがある。突発のときの人手不足を感じる。
・ヘルパーも当たりはずれがある。

【農福連携について】

・ダウン症で支援学校に通っている子供がいる農家がいるが、実家でも従事してもらうのは難しい。第一線、農作業ではムリと感じる。６次化での加工の軽作業、障害の程度にあわせて実施すればできる人もいるが、正直難しい。
→市内に支援学校の話もある。国も補助金をあつくしている。

・３人の子供が障害あり。発達障害と、自己管理は人が介入しないと無理。農家がずっとついてないと難しい。でもそれは農家がするというより、管理者がいればできるかもしれない。指導者は必要、本人が気に入ればできるか。

・農福連携において障害をもっている人はどう思っているのか。本当にやりたいのか、意思が大事。
→学校に農業の科、美深もある。選んで行っている。体力づくり、心構えを教えている。農業をしたいかはわからない。
→福祉課では障害の程度あるが働きたい人もいるが、通年雇用が少ないので連携がひっかかる。

【外国人材の確保】

・外国人雇用している人はいない。

・今後、考えている人は、言葉の壁次第。人件費による、同額なら日本人。

【労働力を維持】

・ヘルパーさん用のプレハブが増えている。トイレも。

・社員旅行、温泉旅行などをしている人もいる。

２．　持続可能な生産基盤、生産性の高い農業・農村

【スマート農業】

・導入していないのは、圃場が小さいから、基盤整備して大区画がされれば導入したい。

・自動操舵も自分が乗れば省人化より負担の軽減になる。

・自動操舵で運転する人は変わったか→東山では聞く。

・作業機をつけての作業の場合は土質を知っている必要がある。

・昨年、自動操舵を入れている、補助率を上げてほしい。まだ入れていない人もこれから考えられる。

【鳥獣害】

・電牧４段を張り続けている。管理をしっかりすることで被害を食い止めている。隣はしてなかったが、今はしている。国でいれたネットも効く効かないところがある。管

理ができていないところもある。電牧も下げているだけなど、管理がされていないところが被害の声を出している人もいる。
・抜き打ちで監視しないと、現地で指導や講習する。講習会に地区の担当者。
・内側の人は鳥獣害がわからないだろう。
・全部を囲うのは難しい、要所で。土地柄もある。
・アライグマも増えている。山手では熊も。
・自衛隊の協力は。
→上富良野～占冠まで話し合い、協猟、自衛隊は追い込み、撃つのはハンター
昔、釧路で実施していた。
・農家がハンターをすると、兼務が大変。本業に影響がある。
・東大演習林の話では、個体数調査で増えている。多胎が増えているのでは。お互い意見交換をする場もあっても良いと思う。

３．　ふらのブランドの確立

・ふるさと納税の総体のメロン６割を占める
→納税のお金を農業振興にまわせる。その循環がうまれれば。
・メロン、味はふらの、香りは夕張。今年は値が高かった。
・観光とのマッチングをする必要がある。
・北の国からの脱却。観光のイメージと農業のイメージをリンクさせる必要がある。
・農家がＰＲするより市が補助金で頑張ってもらう。
・補助金を施設園芸に。
・これ以上メロンを増やすのは難しい。手作業だから。これが価値ともなっている。
・ハウス助成があっても人手がたりない、後継者もいない。補助するなら後継者や新規就農に向ければ良いのでは。
・再編事業進んだら、ハウス面積は減になる。

４．　その他

・畑作農家について
全体として、基本的な技術の底上げが今後必要なので、施設園芸以外にも補助が必要。
ふらの産小麦のＰＲは昨年していたが、あまり知られていない。
ビール麦をつかったビールを作る計画（農協）。ニッカにも出している。

５．　５年後、１０年後、描く将来像

・若い人が減っているが面積は増える、機械も高くなる。マイナスである。そこを補填するものがあれば、若い人が継ごうと思えるのでは。
・子供が育ちやすい環境を整備してほしい。

６．　跡継ぎを決断した理由

・社会に出て、続かなかった、家にちゃんとした職がある。
・公務員になろうと思ったが、面積を増やしたから
・親が大変そうなので助けたかった。実際は、続けるために苦労しているが楽しんでもいる。
・エンジン、機械が好き。農業に抵抗はない。会社員も良いが時間に縛られない、魅力、親の年齢含めて、小さいころからしようと思っていた。
・弟が継ぐと思っていたので継ぐ気はなかった。父は３５歳でメロン生産組合会長、組合長も歴任。継がなくてもいいとは言っていたが、父が一代でここまで大きくしたものを終わらすのはもったいない。父の仕事を尊敬している、超えられなくても維持、潰さない気持ちを持っている。
・親は農家以外の仕事についた、親の実家に継いだ。やるやらないは農家になる選択肢があるかないか。興味が沸くことでついた。最初の導線、食に関わることが大事。